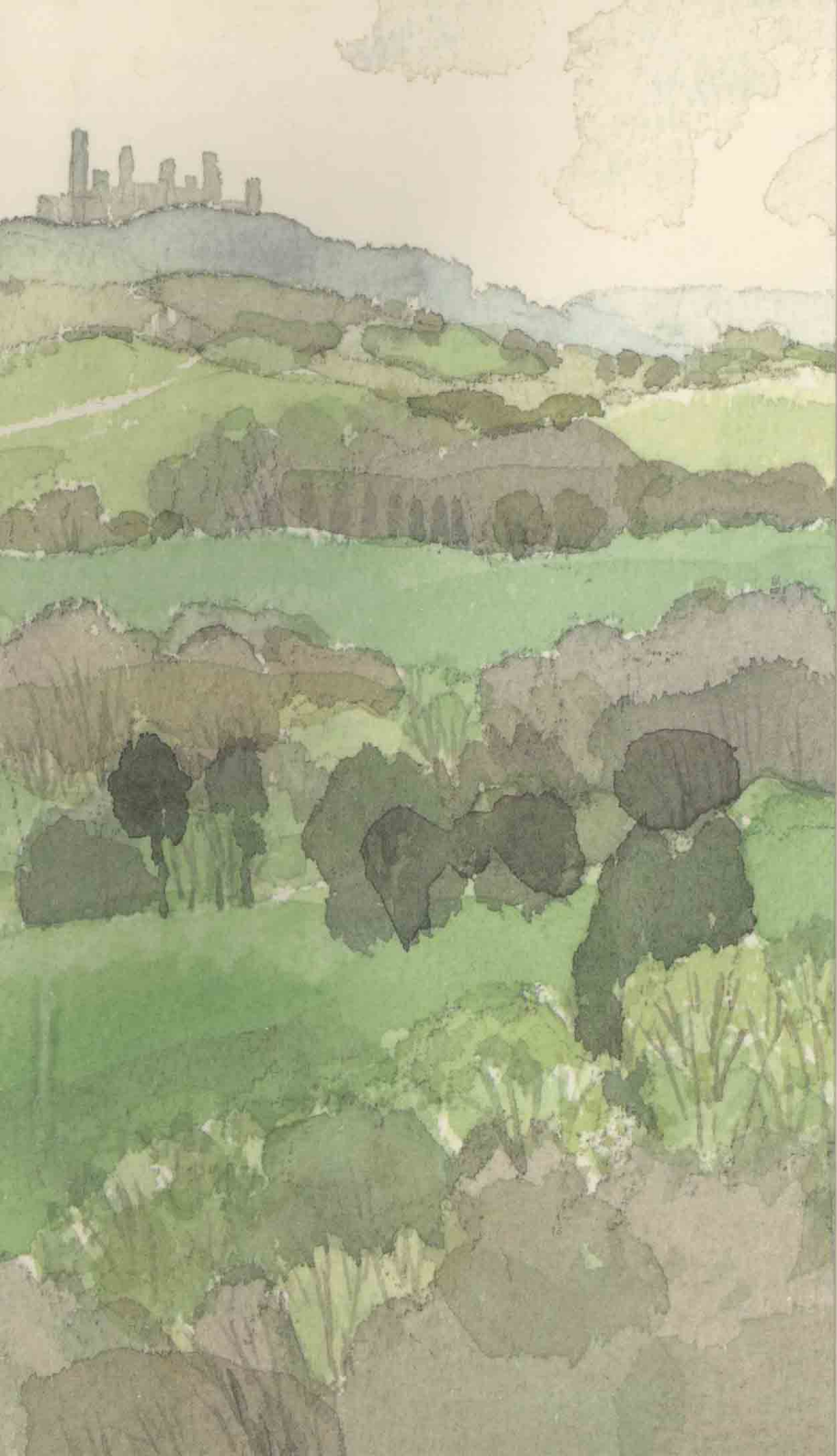




どこか遠くへ

新・ちくま文学の森
10

筑摩書房

どこか遠くへ 〈新・ちくま文学の森10〉

一九九五年六月二十二日 第一刷発行

編者 鶴見俊輔（つるみ・しゅんすけ）

安野光雅（あんの・みつまさ）

森毅（もり・つよし）

井上ひさし（いのうえ・ひさし）

池内紀（いけうち・おさむ）

発行者 森本政彦

発行者 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三 ㊟二一

振替〇〇一六〇一八―四二二三

装本 安野光雅

印刷所 三松堂印刷

製本所 鈴木製本所

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが左記に御送付下さい。送料小社負担にてお取替致します。ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。

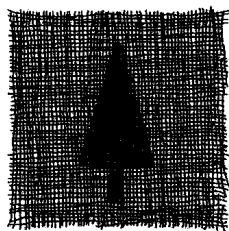
〒三三三 大宮市柳引町二一六〇四 筑摩書房サービス

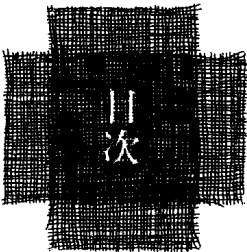
センター TEL〇四八―六五一〇〇五三

OS. TSURUMI M. ANNO T. MORI H. INOUE

O. IKEUCHI 1995 Printed in Japan

ISBN4-480-10130-6 C0393





目次



日本奥地紀行おくちより

イサベラ・バード 高梨健吉・訳 …… 6



出発まで

……… 山下清 …… 9

日日にちにち雑記より

……… 武田百合子 …… 25

流浪るろうの手記

……… 深沢七郎 …… 41



一日の王

……… 尾崎喜八 …… 85

秋の彷徨ほうこう

……… 辻まこと …… 93

爪哇ジャワ

……… 金子光晴 …… 109



豆の葉と太陽

………

柳田國男 ……

131

五足の靴より

………

北原白秋・与謝野鉄幹・吉井勇・



飛驒の秘密

………

坂口安吾 ……

155

房総鼻眼鏡

………

内田百閒 ……

181



旅商人の話

………

ディケンズ 石塚裕子・訳 ……

213

黒んぼの人形

………

オコナー 須山静夫・訳 ……

241

なにかが起こった

………

ブツアーティ 脇功・訳 ……

281



ウェークフィールド

………

ホーソーン 大橋健三郎・訳 ……

291

竹青

.....

太宰治

.....

311

心願の国

.....

原民喜

.....

333

酒の精

.....

吉田健一

.....

347



頻伽^{びんが}

.....

澁澤龍彦

.....

371



眠りについて

解説にかえて

.....

森毅

.....

408

どこか遠くへ

日本奥地紀行（第一信）より

横浜よこはま

オリエンタル・ホテル 五月二十一日

荒涼こうりょうたる

海原を航海し続けること十八日間で、シテ

イ・オブ・トーキョー号は、昨日の朝早くキング岬みさき（野

島崎じまざき）に到達とうたつし、

正午には海岸の真近に沿って江戸湾えどわん

（東京湾）を北進していた。穏おだやかな日和ひよりで、うす青く

空がすすんでいた。日本の海岸線は実に魅力的みりよくてきだという

ことだが、この日の海岸は、色彩しきさいも形状も、少しも眼めを

驚おどろかすものがなかった。その深い山の背が樹木に蔽おほわ

れて断続的に続き、水際から聳そびえ立って見える。山間の

入口には、薄墨色うすすみいろの屋根の深い家屋が部落をなしており、

一八三一年イギリス生まれ。一八七八年六月から九月に日本各地を旅行し、妹へ送った手紙をもとに旅行記を書いた。

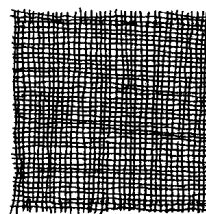
米作の段々畑は緑色に輝いてイギリスの田園の芝生を思
わせ、非常に高い所まで伸びて、山の暗い森の中に消え
てゆく。海岸に人家の多いことは印象的であった。どの
入江にも漁船が多く、私たちは五時間のうちに何百、い
や何千という漁船に出会った。岸辺も海も、そして漁船
も、みなねずみ色にかすんで見えた。その船体はペンキ
が塗ってなく、帆は真っ白い綿布であった。ときどき船
尾の高い帆船が幽霊船のように傍を通って行った。四角
の白帆をつけた三角形の漁船の群と接触しないように、
私たちの船は速度をゆるめた。こんなふうにして、何時
間も静かなねずみ色の海上を進んで行った。

甲板では、しきりに富士山を賛美する声があるので、
富士山はどこかと長い間さがしてみたが、どこにも見え
なかった。地上ではなく、ふと天上を見上げると、思い
もかけぬ遠くの空高く、巨大な円錐形の山を見た。海抜
一三、〇八〇フィート、白雪をいただき、すばらしい曲

線を描いて聳えていた。その青白い姿は、うっすらと青い空の中に浮かび、その麓や周囲の丘は、薄ねずみ色の霞につつまれていた。「注」それはすばらしい眺めであったが、まもなく幻のように消えた。トリスタン・ダークン山（南米最南端の火山）——これも円錐形の雪山だが——を除いては、これほど荘嚴で孤高の山を見たことがない。近くにも遠くにも、その高さと雄大さを滅殺するものが何物もないのである。富士山は神聖な山であり、日本人にとっては実になつかしいものであるから、日本の芸術はそれを描いて飽くことがない。私が初めてその姿を見たのは、五〇マイルほど離れたところであつた。

〔原注〕これは全く例外的な富士山の姿で、例外的な天候状態によるものである。ふだんの富士は、もつとがっしりと低く見えて、扇をさかさまにした形によく譬えられる。

出発まで



山下清

やましたきよし
山下清 一九二二（大正一一）——一九七一

（昭和四六） 早くに父と死別、精神薄弱児のための救護施設で育つ。十代半ばで貼絵を学び、精神科医の式場隆三郎によって世に紹介された。ジャーナリズムに騒がれたが、当人は天衣無縫にわが道を歩き、リュックサック一つで全国を放浪、素朴（ナイーヴ）画と呼ばれる一群の美しい造型をのこした。文章にも特異な才をもち、「ヨーロッパぶらりぶらり」などの著書がある。「出発まで」はその冒頭のところ。

ヨーロッパへ旅行する

そのわけはというと

ぼくはこんどヨーロッパへ旅行することになったので、そのわけはというと、ずっと前に八幡^{やわた}学園をとびだしてから、あっちこっちを歩きまわって、二十なん年のあいだに日本のくにの五分の一くらい見物してしまった。

それからぼくの展らん会がはじまって、五年のあいだに北海道の釧路^{くしろ}から琉球^{りゅうきゅう}まで、百なん十回も展らん会があったので、日本じゅう、ほとんど見てしまったことになるかもしれない。そのあいだにぼくは貼^は絵^えやスケッチや焼物の絵などたくさんかいて、もう放浪^{ほうろう}の癖^{くせ}もおったので、式場先生がごほうびに、外国へつれていくことになることになった。

それなのにまだ放浪の癖がよくなおりきっていなかったもので、三度くらい家をとびだしたのに、すぐつかまってしまつて、とても日本で放浪するわけにはいかなかったもので、自分ではこれでわるいくせはすっかりなおったと思つてゐる。それでも、もう放浪はしませんでした。

約束やくそくしてから三度もたびだしているの、世間はなかなか信用してくれないといわれた。ほんとうのことをいうと、ぼくはいまでも、自分のいきたいところへぶらりとでかけるのは、そんなに悪いことでないような気がするのですが、世の中には放浪はうろうということは悪いことだというきめきまりがあつて、ことに外国では、日本よりもずっと悪いことにしてあるという話なので、外国へいくのが二度もだめになり、がっかりしてしまつた。

ぼくは、日本国中ほとんど歩いてしまつたので、どうしても外国を見物したいので、そのためにどんな約束をしてもいいと思つたら、もういちど式場先生が外む省がくしやうという役所にたのんでくれることになつた。どんなことをいつたのんだのか、ぼくは知らないが、先生に

「ぼくは外国のことばをしゃべれないから、外国を放浪することはできません」というと、「うん、お前はおくびようだから、ことばのわからない国でどっかへとびだしてしまうことはないだろう。その点は安心だが、お前には三つのわるい癖くせがある。人のまえですぐ裸はだかになることと、どこへでもつばをする、一番わるいのは立小便をする癖で、これをなおさないと外国へつれていくことができない」といわれた。

「ぼくは女のストリップでないから、風呂ふろへはいるときと自分のへやにいたときのほかは裸になりません。つばは紙のなかにしろといわれていますが、紙をつかうと紙がなくなつてしまいます。紙がなくならないように、そとへつばをするので、外国へいくときは、紙をたく

さんもっていきます。立小便は、ぼくは便所のあるところではでたくないの、でたくないの、で便所をつかわないと、便所のないところでたくなるの、がまんできるあいだはがまんして、がまんができなくなつて立小便をするのです。外国へいったら、でたくないのに便所へいけるかどうかわかりませんが、がまんできるうちに便所をさがします。どうしても便所がなかったら、たれてもいいですか」というと

「外国では、立小便をするとはっせられるが、たれてもはっせられない。立小便よりはたれる方がいいのだ」といわれたので、日本では、小便をたれるのは赤ん坊あかばうで、立小便をするのはおとななので、外国では、おとなと子供と反対だと思つた。

先生が、

「外む省へいくと、君はなんのためにヨーロッパへいきたいのか、ときかれるが、お前はなんと答えるか」というので

「絵をかくためと、めずらしいところを見物するのが目的です。そのほかになん百万人のなかには、立小便をしたり、裸になつたりする人間もいるかも知れないから、そんなのをみられたら面白いと思います。一番みたいのは、ヨーロッパのルンペンです」というと

「あとの方はいなくてもいい、はじめの方だけにしておけ」といわれたので、人間は正直にいい場合と悪い場合があるので、外む省では、半分だけ正直に答えて、あとの半分はだまっていることにした。

式場先生に外む省につれられていくときは、心配で胸がどきどきした。ぼくはおまわりさんや公安官に答えるのがへたで、放浪のとき、なんどもつかまって、どろぼうとまちがえられて、ろう屋に入れられたことがあります。

そのときは、あんまりほんとのことをいうと、八幡学園におくりかえされてしまうので、親も家もなく、職をさがして歩いているのだという、大てい、それはうそだろうといわれて、ほかの町におっぱりだされた。こんど外む省で、へたなことをいって、それはうそだろうといわれると、ヨーロッパいきがだめになるので、ほんとのことだけ、なるべくすこしいうことにした。放浪のわけを話すのよりも、外国へいくわけをはなすのはむずかしいものだ。

外む省の人は、おまわりよりもやさしそうなので、式場先生がぼくのためにかいてくれた書るいをみながら

「あなたが山下清さんですね」というので

「はい、ぼくは大正十一年三月十日に浅草の田中町に生れたので、三月十日はむかしの陸軍記念日です。いまは戦争にまけて陸軍記念日でなくなったので、ふつうの日に生れたので、親は」というと、

「いや、そういうことはみんなわかってるから、いわなくともいいです」といって、だまって書るいをみているので、なにをきかれるのかと思っている